尾道の歴史と遺跡シリーズ５

尾道と塩の文化

平成 30 年 3 月

尾道市教育委員会

尾道の塩づくりの歴史

塩は、過去でも現在でも、生活に欠かせない必需品です。

古くは弥生時代からの塩づくりが行われ、特に瀬戸内海は温暖な気候やその地形などから塩づくりが盛んに行われていました。弥生時代から奈良時代くらいまでは、土器を使用した「藻塩焼き（もしお）」により塩を生成し、平安時代や鎌倉時代には、「揚浜式塩田（あげはま）」による塩づくりが行われます。

地域によって、その段階は様々ですが、尾道周辺では、中世段階まで、揚浜式塩田が利用されていたようです。

その後、近世になると、「入浜式塩田（いりはま）」による塩作りが行われ、大規模に塩田が整備され、塩の大量生産が行われてます。それにより、商人の中からいわゆる豪商も出現し、尾道の経済の中心となります。塩は北前船により、遠く東北などにも運ばれました。

入浜式塩田は、近世・近代を代表する塩作りの方法であり、戦後まで続きます。その後、ヨーロッパから導入された流下式塩田へと姿を変え、昭和 40 年代に各地で塩田は終焉を迎えます。

こうした塩作りの歴史は、塩が代表的な生産品であった尾道周辺地域の歴史の一部であり、その痕跡は市内各地に残っています。

生口島の塩田

塩田の作業風景

“藻塩焼き”から“塩田”まで

古代の人々は、海藻や土器を使って塩を作っていました。そこから時代を経て、海水中の塩分を海浜の砂に付着させ、利用する製塩法へと発達しました。これが“揚浜式塩田”（塩田を用いての製塩）です。

塩田は、盛土の上に、海水が地下に染み込まないように粘土などで防水層をつくり、その上に粒子の細かい砂（塩砂）をしきつめます。砂の上に海水を丁寧にまき、こまめに砂をかき混ぜながら、天日と風により水分を蒸発させます。その後、塩砂をかき集めて、海水で洗ったものが“かん水”（鹹水）となり、それを製塩釜で煮詰めて塩の結晶が得られます。これにより、土器による塩作りよりも、より多くの塩を作ることができるようになりました。

古代

藻塩焼き

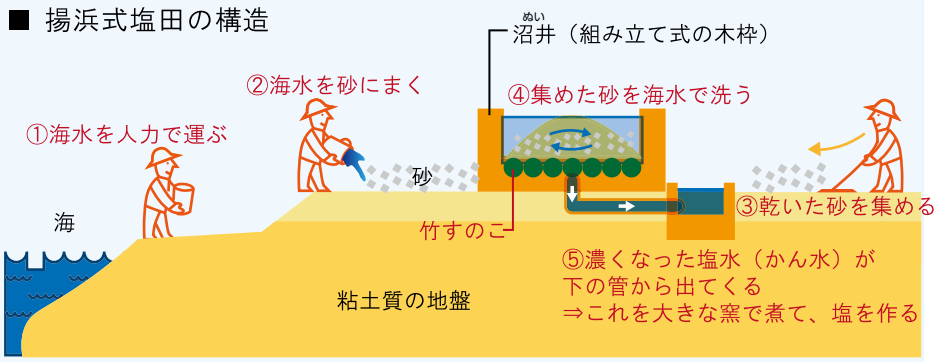
弥生時代から奈良時代くらいまで。
海藻に海水をかけて乾燥させた後、海水で洗う。すると、海藻についた塩分が海水に溶けて、さらに濃い塩水（かん水）ができる。これを土器で煮る。
土器が割れて失敗することが多く、少しずつしか塩が作れなかった。

中世

揚浜式塩田

平安時代から鎌倉時代くらいまで。
海水中の塩分を“砂”に付着させて、製塩に利用する方法。砂に海水をかけて乾燥させる。その砂を沼井に集めて、海水で洗うと、濃い塩水（かん水）が取れる。これを釜で煮詰めて塩を取る。
この方法により、大量の塩をつくることができるようになる。

■ 揚浜式塩田の構造

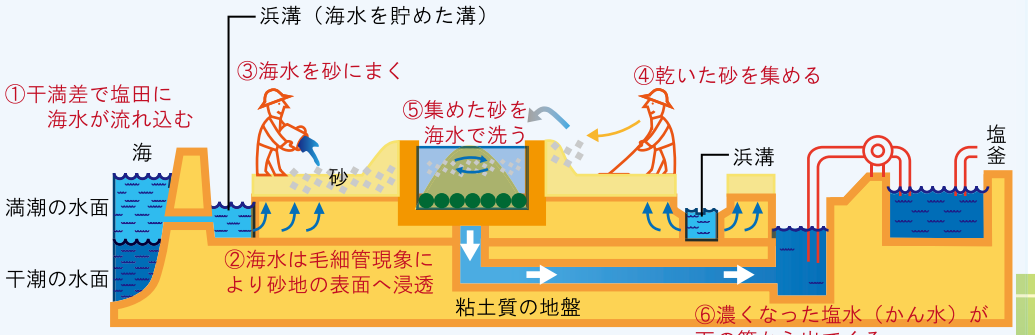


近世

入浜式塩田

揚浜式塩田の進化系。
今まで人力で海水を運んでいたが、潮の干満を利用して、海水を塩田に入れられるようになった。製塩の過程は、揚浜式と変わらない。

■ 入浜式塩田の構造



※毛細管現象…細い空間に液体が浸透していく現象。
例として、筆先にインクをつけると、少しずつ筆全体に広がっていくこと

満越（みちごえ）遺跡（浦崎町満越）

満越遺跡は、浦崎町満越地区の南側海岸沿いにある、古墳時代から奈良時代まで（今から1700～1300年前）の長い期間、塩を生産していた痕跡の残る遺跡です。

発掘調査の結果、塩を作るための炉跡、塩作りの際に何らかの祭り事を行なったと考えられる祭祀土坑（さいしどこう）が確認されました。遺物は、製塩土器の他に“畿内・吉備・山陰の特徴を持った土器”が出土しています。

畿内・吉備・山陰の３地域は、当時の日本列島の中で一大勢力となっており、満越遺跡からこれらの土器が出土することは、尾道周辺もその勢力の中に組み込まれていた可能性が高いと考えられます。満越遺跡での塩作りが３地域とどのように関わってくるのか、どのような人達がどのような方法で塩を作っていたのか、どこに、どうやって運んでいたのか。これらの問題を考えることは、当時の社会の仕組みを解明することにつながるため、満越遺跡はきわめて重要な遺跡と言えます。

満越遺跡 遠景

発掘調査での検出状況

製塩土器 出土状況

製塩炉の跡

製塩土器

満越遺跡からは多量の製塩土器が出土していますが、すべて同じ形をしているわけではありません。土器の形や厚さなどの特徴から、全部で**４つのタイプ**に分けることができます。出土した層の上下関係（基本的に上の層が新しく、下の層が古いという考え方）や備讃瀬戸（びさんせと）周辺に分布する製塩遺跡の調査例を踏まえると右図の様に土器の形が変化し、時期もそれぞれ異なるものと分かりました。

おおはまひろはた
大浜広畠遺跡

因島北部では、馬神遺跡（時代不明の包含地）、大浜広畠遺跡（縄文・古墳時代の包含地）、倉谷遺跡（縄文・古墳時代の包含地）などが確認されています。共通しているのは、海岸沿いの緩斜面地、あるいは当時入り江となっていたと考えられる少し奥地といった、海に近い場所に分布していることです。

倉谷遺跡は、1960 年に因島市教育委員会が調査を行い、縄文時代晩期の土器、土師器、須恵器、剥片等が出土しています。

大浜広畠遺跡は、1965 年に広島大学によって、発掘調査も行われており、縄文時代晩期と古墳時代前期の遺跡であることが確認されています。縄文土器、土師器、須恵器、石鏃、石匙、土錘などが出土しています。特に粗製の石匙が多量に出土していることと、遺跡南端に土師器や製塩土器の集中箇所があり、注目される遺跡です。集中箇所は、竪穴住居跡であることも確認されています。

大浜広畠遺跡 遠景

土師器 出土状況

製塩土器（因島史料館）

土師器（因島史料館）

脚台タイプ
古墳時代前期

無脚コップタイプ
古墳時代中期中葉～後期

大型ボウルタイプ
古墳時代後期～飛鳥時代

薄手尖底タイプ
飛鳥時代～奈良時代

尾道 塩の文化マップ

凡 例

- 尾道市
- 塩田
- 製塩遺跡

大田貝塚(広島県史跡)

山波崎遺跡

串の浜遺跡

山波

栗原沖

吉和

肥浜

天女浜

満越

富浜

戸崎遺跡

古江浜遺跡

百島

津部田

大浜広畠遺跡

満越遺跡

重井

倉谷遺跡(尾道市史跡)

文久新開

生口

土生

瀬戸田歴史民俗資料館（塩蔵）

中近世を通じて塩を積み出していた港町瀬戸田にある歴史民俗資料館です。瀬戸田の豪商三原屋堀内家の塩蔵として使用されていました。生口島、高根島で使用されていた農機具、漁労具等の民俗資料、弥生土器等の埋蔵文化財、そして、生口島の塩田で使用されていた沼井掘鍬（ぬいほりぐわ）や手曳（てびき）などの塩田関係資料が展示されています。

瀬戸田歴史民俗資料館

開館日　土曜・日曜・祝日
（12月29日～1月3日を除く）

開館時間　10：00～16：30

住所　尾道市瀬戸田町瀬戸田254－2

料金　無料

文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

尾道の歴史と遺跡シリーズ５
『尾道と塩の文化』
平成３０年３月
編集：尾道市企画財政部文化振興課
地域の特色ある埋蔵文化財活用事業